

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370479

研究課題名(和文)日本語における使役動詞の獲得過程に関する実証的研究

研究課題名(英文)Experimental Studies of Children's Acquisition of Causatives in Japanese

研究代表者

山腰 京子 (Yamakoshi, Kyoko)

お茶の水女子大学・基幹研究院・准教授

研究者番号：20349179

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本語の使役動詞の意味と構造に関する幼児の獲得について実験的手法による調査を行った。語彙的使役動詞は主に直接使役の意味を、生産的使役動詞は主に間接使役の意味を持つが、その区別を3～6歳代の幼児が獲得できているのかについて、質疑応答法、絵画選択法、真偽値判断法を用いて実験調査を行った。その結果、語彙的使役動詞の直接使役の意味の獲得は早く、4歳代で既に獲得しているが、生産的使役動詞の間接使役の意味の獲得は6歳代でも50%前後という低い正答率で、その獲得は遅れることが明らかとなった。遅れの原因は、生産的使役動詞の複文構造と使役形態素「させ」の獲得の遅れに起因するのではと考えている。

研究成果の概要(英文)：This study experimentally investigates children's acquisition of the meanings and the structures of causatives in Japanese. In Japanese, lexical causatives mainly have direct causative meanings and productive causatives mainly have indirect causative meanings. This study examined whether 3 to 6-year-old children know the distinction by using the question-answering task, the picture selection task and the truth-value judgment task. The results show that the acquisition of direct causative meanings of lexical causatives is quite early, around the age of four, whereas the acquisition of indirect causative meanings is late, possibly around the age of seven. I have suggested that the causes of the delay may be due to the late acquisition of the bi-clausal structure of productive causatives and the position of the causative morpheme sase.

研究分野：言語学、第1言語獲得

キーワード：日本語 語彙的使役動詞 生産的使役動詞 直接使役・間接使役 複文構造 質疑応答法 絵画選択法 真偽値判断法

1. 研究開始当初の背景

日本語の使役動詞には語彙的使役動詞と生産的使役動詞がある。語彙的使役は語幹の動詞と使役形態素が形態上非弁別的で非生産的であり、被使役者が主節の目的語として解釈される(例:「くまがねこを転がした。」)語彙使役動詞は一般的に動作主が直接的に目的語に働きかける直接使役の意味で用いられる。生産的使役動詞は語幹と使役形態素「させ」が形態上独立し生産的であり、被使役者が補文の主語として解釈される(例:「くまがねこに転がらせた。」)生産的使役動詞は一般的に動作主が被使役者にある行為を間接的に行うようにさせるといふ、間接使役の意味で用いられる。

日本語の使役動詞の獲得研究は、これまで少人数の子供の縦断的自然発話資料の分析が中心に行われてきた。Ito (1990)は、一人の子供の縦断的自然発話資料から、3・4歳児の使役形態素「させ」の誤用を指摘している。(例:「とまさして」(とめて)「くつをはけさせて」(はかせて)「おりさせて」(おろして)) Morikawa (1997)は CHILDES (Child Language Data Exchange System) データベースの一人の子供の縦断的自然発話資料を詳細に分析し、語彙的使役動詞の獲得過程を明らかにした。Murasugi, Hashimoto and Fuji (2007)は収集した一人の子供の縦断的自然発話資料から語彙的使役と生産的使役動詞の獲得過程を明らかにしている。

2. 研究の目的

上記のように、少人数の幼児の縦断的自然発話資料に基づく観察はなされてきたが、多くの幼児の使役動詞の獲得に関する全体的な傾向はまだ明らかにされていない。また、語彙的使役動詞と生産的使役動詞の統語的・意味的相違の獲得に関して、実験に基づく実証的研究は殆どなされていないため、実験調査により日本語の語彙的使役動詞と生産的使役動詞の意味と構造の獲得過程を明らかにしたいと考えた。

3. 研究の方法

3歳から6歳代の子どもの語彙的使役動詞と生産的使役動詞の意味と構造の獲得に関する実験調査を行った。

(1)まず平成26年度には、語彙的使役動詞と、非対格動詞に使役形態素が付加した生産的使役動詞のペア(降ろす・降りさせる、倒す・倒させる、転がす・転がらせる)の理解につ

いて調査した。人形を用いたストーリーをまず幼児に聞いてもらい、その後に動詞を含む質問をする(e.g. 降ろした/降りさせたのは誰かな?)という質疑応答法を用いて、3~5歳児12人に対して保育園に協力を依頼し調査を行った。

(2)次に、平成27年度には、生産的使役構文の複文構造と他の複文構造(~してもらう、~してほしい、~と思う)との習得時期の差について、4~6歳児10人に対して保育園に協力を依頼し、真偽値判断法を用いて調査を行った。生産的使役構文においては使役形態素「させ」が含まれ、また下の節の主語が「に」格で現れるため、下の節の「自分」の先行詞を下の節の主語に解釈することが幼児にとっては難しいのではないかと予測し、他の複文構造の調査結果との比較を試みた。

(3)平成28年度には、以前行った二重他動詞にあたる語彙的使役動詞と、二重他動詞に使役形態素が付加した生産的使役動詞のペア(渡す・渡させる、飛ばす・飛ばさせる、着せる・着させる)の理解に関する、4~6歳児23人に対する絵画選択法と真偽値判断法による調査の再検討を行った。

4. 研究成果

(1)平成26年度の、語彙的使役動詞と非対格動詞に使役形態素が付加した生産的使役動詞のペア(降ろす・降りさせる、倒す・倒させる、転がす・転がらせる)の理解に関する質疑応答法を用いた実験では以下のような結果を得た。まず語彙的使役動詞の直接使役の意味は3歳代後半からすでに90%以上理解できているのに対し、生産的使役動詞の間接使役の意味は3歳児で16.7%、4歳児で20%、5歳児でも27.3%しか大人と同様の回答を得られず(表1を参照)、生産的使役動詞の間接使役の意味とそれに関わる複文構造の理解が5歳児でもできていないと考えられることが明らかになった。この成果を国際言語学会 Formal Approaches to Japanese Linguistics 7において発表し、参加者から多くの有益な助言を得ることができた。

表1: 語彙的使役動詞と生産的使役動詞(非対格動詞+させ)の理解

語彙的使役	3-5歳児 (N=12)	大人 (N=10)
降ろした	91.7% (11/12)	90.0% (9/10)
転がした	100% (12/12)	100% (10/10)
倒した	100% (8/8)	100% (10/10)

合計	96.9% (31/32)	96.7% (29/30)
生産的使役		
降りさせた	16.7% (2/12)	80.0% (8/10)
転がらせた	27.3% (3/11)	80.0% (8/10)
倒れさせた	22.2% (2/9)	70.0% (7/10)
合計	21.9% (7/32)	76.7% (23/30)

(2) 平成 27 年度に行った、生産的使役構文の複文構造と他の複文構造（～してもらう、～してほしい、～と思う）との習得時期の差に関する、真偽値判断法を用いた調査結果は以下のものであった。まず生産的使役構文（e.g. 「ぞうさんがぶたさんに自分の帽子をかぶらせたよ」）において下の節（の「自分」の先行詞は、大人の場合には下の節の主語でも上の節の主語でも容認されるが、今回の調査で幼児 10 人の下の節の主語を容認した割合を調べたところ、4 歳児が 100%、5 歳児が 50%、6 歳児 0%であった。「～もらう」について下の節の主語を容認した割合は 4 歳児が 75%、5 歳児が 50%、6 歳児が 0%であった。「～ほしい」について下の節の主語を容認した割合は 4 歳児が 75%、5 歳児が 100%、6 歳児が 0%であった。「～と思う」について 4 歳児が 100%、5 歳児が 50%、6 歳児が 100%であった。これらの結果から、生産的使役の複文構造の獲得が他の複文構造の獲得と比較して遅れているという点は見受けられなかった。ただ 4 歳児が高い割合で下の節の主語を容認しているのは真偽値判断法における Yes-bias の可能性が高いのかもしれない、実験方法の再検討が必要であると考えている。

(3) 平成 28 年度に論文執筆のため再検討を行った実験結果は、以下のようなものである。二重他動詞にあたる語彙的使役動詞と、二重他動詞に使役形態素が付加した生産的使役動詞のペア（渡す・渡させる、飛ばす・飛ばさせる、着せる・着させる）の理解に関して、4～6 歳児 23 人に対して絵画選択法と真偽値判断法による調査を行った。絵画選択法は、直接使役の状況を表す絵 1 枚と間接使役の状況を表す絵 1 枚の計 2 枚を被験者の前に並べ、テスト文の状況をどちらの絵が示しているかを答えてもらう方法を用いた。絵画選択法の結果を以下の表 2 に示す。

表 2：絵画選択法による語彙的使役動詞（二重他動詞）と生産的使役動詞（二重他動詞+させ）の理解

語彙的使役	4～6歳児 (N=23)	大人 (N=15)
(鐘を) 鳴らした	100% (23/23)	93.3% (14/15)
(紙飛行機を) 飛ばした	91.3% (21/23)	100% (15/15)
(手紙を) 渡した	100% (23/23)	100% (15/15)
(服を) 着せた	87.0% (20/23)	100% (15/15)
合計	94.6% (87/92)	98.3% (59/60)
生産的使役		
(鐘を) 鳴らさせた	52.2% (12/23)	93.3% (14/15)
(紙飛行機を) 飛ばさせた	43.5% (10/23)	93.3% (14/15)
(手紙を) 渡させた	43.5% (10/23)	93.3% (14/15)
(服を) 着させた	17.4% (4/23)	86.7% (13/15)
合計	39.1% (36/92)	91.7% (55/60)

表 2 からわかるように、二重他動詞である語彙的使役の直接使役の意味は 4～6 歳児で 85%以上正しく理解できているのに対し、二重他動詞に「させ」が付いた生産的使役の間接使役の意味の理解の正答率は 50%弱と低かった。この結果から、二重他動詞の語彙的使役動詞と生産的使役動詞のペアにおいても、語彙的使役動詞よりも生産的使役動詞の間接使役の意味の獲得が遅いということが明らかになった。

また同じ被験者にさらに真偽値判断法を用いて二重他動詞の語彙的使役動詞と生産的使役動詞のペアの理解も調査した。その結果を表 3 に示す。

表 3：真偽値判断法による語彙的使役動詞（二重他動詞）と生産的使役動詞（二重他動詞+させ）の理解

語彙的使役	T / F	4～6歳児 (N=22)	大人 (N=15)
(駒を) 回した	T	95.5% (21/22)	100% (15/15)
(箱を) 開けた	F	95.5% (21/22)	100% (15/15)
合計		95.5% (42/44)	100% (30/30)
生産的使役			
(駒を) 回させた	T	45.5% (10/22)	93.3% (14/15)
(箱を) 開けさせた	F	36.4% (8/22)	100% (15/15)
合計		40.9% (18/44)	96.7% (29/30)

表 3 からわかるように、真偽値判断法においても、二重他動詞である語彙的使役の直接使

役の意味は4～6歳児で95%以上大人と同様に理解できているのに対し、二重他動詞に「させ」が付いた生産的使役の間接使役の意味の理解の正答率は40%前後と低かった。この結果から、真偽値判断法による実験でも、二重他動詞の語彙的使役動詞と生産的使役動詞のペアにおいても、語彙的使役動詞よりも生産的使役動詞の間接使役の意味の獲得が遅いということが明らかになった。

表1の質疑応答法、表2の絵画選択法、表3の真偽値判断法の3つの実験結果から、語彙的使役動詞の直接使役の意味の獲得は早く、3歳後半から4歳代で既に獲得できていると考えられるが、生産的使役動詞の間接使役の意味の獲得は6歳代でも50%前後であり、獲得が遅いと考えられることが今回の一連の実験調査で明らかになった。この生産的使役動詞の間接使役の意味の獲得の遅さは、生産的使役動詞の複文構造において、言語獲得中の幼児が使役形態素「させ」を置く統語的位置を誤っていることに起因するのではないかという考察を、John Benjaminsから出版される予定の共著論文集の論文“An Experimental Study on Children’s Comprehension of Lexical and Productive Causatives in Japanese.”にて行う予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計1件)

① Yamakoshi, Kyoko, Kayoko Angata and Miura Kaori. “Children’s Interpretations of Lexical and Productive Causatives in Japanese.” *Formal Approaches to Japanese Linguistics*, National Institute for Japanese Language and Linguistics, International Christian University and National Institute for Japanese Language and Linguistics, 27-29, June, 2014.

[図書] (計1件)

Yamakoshi, Kyoko, Kaori Miura, Hanako Jorinbo, Kayoko Angata and Kaori Yamasaki (forthcoming) “An Experimental Study on Children’s Comprehension of Lexical and Productive Causatives in Japanese.” In *the Festschrift in Honor of Professor John B. Whitman*, John Benjamins Publishing Company.

[その他]

ホームページ等

http://researchers2.ao.ocha.ac.jp/html/100001160_ja.html

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山腰 京子 (YAMAKOSHI, Kyoko)

お茶の水女子大学・基幹研究院・准教授

研究者番号：20349179